

Title	ポルトガルを訪ねる(岡本良知著, 日葡協會發行)
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.163(695)- 164(696)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大館氏は上野の同族新田氏の一族であつて、其祖、宗氏子氏明氏明の子義冬に至つて始めて足利氏に仕へ世々將軍の近臣となつて親信を蒙り、幕府の樞機に參畫したのももあり、特に足利氏のふたつひきりやう二引ふたつひきりやう兩ふたつひきりやうを以て其家紋となすことを許された。

本行狀は氏明から後は大體太平記に據つてゐるが、其以降に至つては、大館氏の家乗、譜牒等に基づいてゐるものゝ様で、記載詳密、頗る舊史の缺漏を補ひ、訛傳を正すべきものがある。其記述は大館氏の事蹟を主とするもの乍ら、推して以て足利時代に於ける上流武士の公私生活を想見するに足るものがある。

因に景徐周麟畫像は相國寺塔頭慈照院、大館持房行狀は文學博士三浦周行氏の御所藏に係る。

終に御惠贈を辱うした史學研究会に謹んで感謝の意を表する。

(淺子勝二郎)

ポルトガルを訪ねる

(岡本 良知著
日葡協會發行)

自分は昨今ある必要に迫られて、屢々ポルトガルの地圖を机上に開き、ポルトガルに關する書を繙く。ポルトガルといふ國は、私には、何故か魅力である。時に『ポルトガルを訪ねる』一卷を頂戴した。

本書は、岡本良知氏が昨昭和四年九月上旬より十二月下旬まで約四ヶ月間、ポルトガルに在つて、日本吉利支丹宗門の歴史に關する史料を採訪されたその報告書ともいふべきものである。岡本氏ポルトガルに行かれぬ前既に譯書『初期耶蘇教徒編述日本語學

書研究』の附録として『在葡未刊書一考』なるものを書かれ、アジエダ圖書館以下諸方の圖書館、古文書館に存する未刊書の一部を間接に紹介された事があるが、今回親しく、かの地を訪れて、日本若しくは支那に關する刊本又は未刊書に就いて驚くべき綿密さを以て調査せられたのである。たゞ井澤氏の如き援助者があつたさはいへ、四ヶ月間によく之だけの調査を遂げられた事は、氏のこの方面に於ける蘊蓄と語學の才と勤勉とを物語る。

本書は先づ、最初に「見物の記」と題して、リスボア、エヴォラ、ポルト、コインブラ等氏の歩かれた諸都市の巧みな素描を描きつゝ、圖書館、文書館の外観内容をスケッチ風に記し、時には古書肆の店先に立ちならぶ日本關係書籍の報告に及んでゐる。

次に「未刊書の記」と題し、その一はアジエダ圖書館、アカデミヤ文庫、國立圖書館、外務省文庫に所藏されてある未刊の書翰集を丹念に整理して一通／＼年代順に排列し、その發信者、發信年月日、發信地、宛名、所載書翰集名(重複するものゝ所載翰集は全部擧げてある)を記し、その數は一五四四年から七三年まで六百通を越えてゐる。その發信者と發信地、年月日を見て行くだけでも興味はつきない。

次にセパスチャン・ゴンサルパスの「耶蘇會東印度史」の目次を全部譯出して掲げられ、最後に、かの有名なアジエダ圖書館の *Jesuitas na Asia* 寫本に就いて一々函架番號を擧げ、その内容を詳細に紹介されてゐる。

一體、日本に於ける吉利支丹宗門の歴史を多少とも研究しよう

とする者には、いろ／＼の難關がつけまそう。曰く、國史の智識、曰く、カトリック教に關する理解、曰く、數ヶ國語に涉る語學知識の必要等に。就中直接誰もが感ずるのは語學知識の難關であらう。語學の事でまご／＼してゐると目ざす島に行きつかぬ中に溺れてしまふ。それで多くの人には根本史料に遡る事をせずして、英、獨、佛等、比較的手近なもので間に合せる安易な方法を選ぶ。併し、當底之で満足すべきではない。如何に勞多くともいづれ必ず根本史料まで遡らねばならぬ事論を俟たない。而も最近その趨勢にある。

著者岡本氏のいはれるが如く、ポルトガルは、『底の見えぬ井戸に汲んでも汲んでも残つてゐる水のやうに暫くは盡きない史界の寶庫を存する國』であり、近來漸く我國人の注意もこの方に向ひ、いづれは、日本に關する史料は何かの形にして將來さるべきであらう。(その一部は無論既に將來されてゐやう)。史料はさもすれば散逸し易いものである。史料の探訪は一日早ければ、一日の徳ありと聞く。この意味に於て岡本氏が、在葡日本關係文書の詳細なる目録をつくつて報告せられた事は、この方面に關心を持つもの、大いに悦びとするところである。更に岡本氏が、それらの史料を驅使しての研究を鶴首してまつものである。(吉田小五郎)

切支丹大名記

シユタイシエン著
吉田小五郎譯
大岡山書店發行

シユカエル・シユタイシエン師の「切支丹大名」は、すでに一九〇三年(明治卅六年)に、英文を以て、更に翌年、佛文を以て改正増補

版を刊行され、名著として廣く知られてゐるものである。吉田氏のこの翻譯は、佛文に依たものである。

本書はその別名に、「日本の政治・宗教史上の一世紀(一五四九—一六五〇年)」とあるを以ても分る如く、天文より慶安に至る百年間、即ち、切支丹の傳播よりその根絶に至るまでを取扱つてゐるものであつて、國史上より見ても、最も波瀾に富んだ時代である。師が本書を著すにあたつて、その史料として用ひたものは、當時に布教した宣教師等の書翰であつて、師はこの大部分を東京帝國大學圖書館、上海の耶蘇會圖書館、ナザレ(香港)の外國宣教會の圖書館で見、其他はマカオの文書館と、日本の教會より借覽したと言ふ。我々は足利末期、織田時代、豊臣時代、徳川初期に關して、當時の宣教師の報告や書翰から、我國の記録に残つてゐない、當時の社會狀態や政治狀態を知ることが極めて多いのである。従つて此等の所謂西洋側の史料を根據とした本書が如何なる價值を有するかは言ふまでもない。

師はその序文に於て、

「勿論、本書に於て總ての事が新しくはない。記述せる事實の大部分は、日本の歴史を聊かでも研究した人には、既に知れてゐる事なのである。但し其特別な興味、其特色と言へば、日は猶淺しとはいへ、同じ事實を其真相に於て説き、時には之までの一般の説とは全然相反して説いた所さへある、それでかくて若干の國民的英雄は際どいまでに其光輝を失ひ、幾多の勝利も裏切りや背誓に汚されてゐる。」

と言つてゐる。事實、師の言ふ如く、本書の中に於ては、從來